

投手の障害予防に関する有識者会議 新潟県高等学校野球連盟説明原稿

平成31年4月26日

新潟県高等学校野球連盟

会長 富樫 信浩

皆さん、初めまして。新潟県高等学校野球連盟会長の富樫信浩と申します。この度は、有識者会議を立ち上げていただき、心から感謝いたします。本日は若干お時間を頂戴し、新潟県高野連としての考えを述べさせていただきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。私たちの考え方は、「選手の将来第一義、P l a y e r ' s F u t u r e F i r s t」ということでもありますことを皆様、ぜひご理解いただきたいと思います。

最初に、投球数制限を発表するに至った経緯をご説明いたします。

私たちは、新潟県の青少年野球を取り巻く環境について大きく変化しているという認識から、平成23年11月に「新潟県青少年野球団体協議会」を9団体で立ち上げました。当初は、野球肘等のケガの予防を第一として、野球手帳を作成し、小学5年生から高校2年生までの球児たちに配付すると共に、受診の際はそれを持参して受診するシステムの構築に奔走しました。当然のことながら予防することが大切との考えから手帳の中に独自のストレッチのやり方も紹介し、普及を図ってきたところです。

その後、友情の育成と傷害予防を基本理念として掲げ、協議会を運営して参りました。その活動の柱の一つに「新潟野球サミット」の開催を掲げ、過去2回実施してきました。その第1回目となるH28年1月には、「始めよう！ 楽しもう！ 続けよう！」をキャッチフレーズとした新潟野球メソッドを発表し、ボーイズを加えた加盟10団体で共有し、その普及啓発に取り組んで参りました。昨年12月は第2回目を開催し、各加盟団体の進行状況を確認し合ったところです。投球数制限については、その席上で新潟県高野連の取り組みとして発表したものです。

こうした経緯で活動を継続してきた訳ですが、問題点も見えてきました。

一つは、野球人口減少の加速化です。新潟県に限って言えば、人口減少の6倍のスピードで減少している状況です。また、学童野球等の低年齢層の肩肘の障がいを抱えている生徒が、多数存在することが明らかになってきました。

その状況から考えると、指導者の指導や姿勢に問題があるのではないかと、子供たちの将来を見据えたチーム運営をしているのかどうか、目先の勝利を優先しすぎているのではないかと、保護者への負担もかなりかかっているのではないかなど、単なる子どもたちのスポーツという課題が浮き彫りとなりました。

そこで私たちは、問題点を洗い出し、意見を交わしていく中で、4点の「新潟からの挑戦」事項を決定し、第2回新潟野球サミットで発表したわけですが。その中に「投球数100球を超えた投手は、次のイニング以降登板できない」という投球数制限を設けることを盛り込みました。これは、高野連を除く加盟9団体に対して、選手の将来を第一義に考えるのだという決意と覚悟を表したものです。また、その取り組みによって、単なる障がい予防を図るだけでなく、選手の経験を増やすという目的も含めました。それによる複数投手

制を各チームに導入してもらおうという意図も大いに含まれており、試合のみならず練習からそうした姿勢で取り組むことが重要と考えました。一方で、人数の少ないチームが不利となるとの意見もありましたが、新たな選手の可能性発掘の機会にできるのではないかと前向きに捉え、指導者の意識改革にも繋がると考えたところです。

投球数制限について、様々な議論がある中で、待球作戦やファール打ちを理由とした反対意見が現場から多数上がっているようです。残念なことですが、それは、そもそも次元の違う話ではないでしょうか。勝つためには、どのような手でも使ってよいものなのではないでしょうか。

私が考える大切なことは、「スポーツマンシップ」です。そのことを根底におき、今一度問い直していくことが、野球の魅力の再発見に繋がり、ひいては、野球の、そしてスポーツの将来に大きな影響を与えると考えております。教育の一環としての高校野球はまさにそのことを突き詰め、醸成していくことが責務であると私は考えています。

新潟県高野連、並びに新潟県青少年野球団体協議会は、投球数制限を切り口に、ここに掲げる2点について今後の野球界で必要なものだと考えています。

一つ目は、生涯にわたって野球を楽しむ環境づくりを大人たちが行っていくことです。障がい予防としての投球数制限もこちらに含まれます。野球を選んでもくれた子供たちの体を守ること、そして、これからスポーツをしたいと思っている子供たちに、野球を選んでもらえる環境にすることです。これは、急がなければならないと感じています。

2点目は、指導者を含めた野球関係者が、選手の育成方法について、議論を交わし、深く考えていくことの必要性です。高校野球の本来ある魅力とは何でしょうか。ひたむきさや、正々堂々とした姿、清々しさを、人々は求めているものではないでしょうか。単なる勝ち負けではなく、尊重、勇気、覚悟といったスポーツマンシップを兼ね備えた人材育成によって野球をやってよかったと思ってもらえることが大切ではないでしょうか。それが野球人口減少対策に大いに役立つものと考えます。

私たちは、野球を通じた教育活動を行うにあたり、勝利に偏りすぎた指導に陥ってきいてはいなかったでしょうか。私も含め「スポーツマンシップとは？」と聞かれ、即答できる人がどのくらいいるのでしょうか。私たちは、そのことをおろそかにしてきた、だから今ここで見直す場面に来ているのではないかと思います。ですから私も含め、スポーツマンシップの理解、指導、浸透が必要であると考えます。新潟県としては、スポーツマンシップはもとより、スポーツの価値を高めるべく、「スポーツインテグリティ」の考え方に基づいた活動を今後も推進していこうと考えております。

投球数制限は、それに対する切り口の一つでしかありません。今会議においては、「投球数制限」を切り口に、「選手の将来を第一義」として、その方向性を見出していただき、高校球児のみならず、現在野球をやっている低年齢層の球児たち、そしてまだボールを手にしていない子どもたちのこともお考えいただき、一定の方向性を示していただきたいと思います。

冒頭に貴重なお時間をいただき誠にありがとうございました。よろしく願い申し上げます。